

[資料]

オーラル・ヒストリーでたどる 島根県立国際短期大学の創立と展開

—島田雅治元学長の証言—

島 田 博 司

はじめに

1. 島田雅治氏の略歴
2. オーラル・ヒストリーによる証言記録
 - (1) 開学の準備
 - (2) 短大の開学
 - (3) 島根の教育に残した足跡について

おわりに

はじめに

本稿は、現在の島根県立大学浜田キャンパスの前身である島根県立国際短期大学が島根の教育においてなにを成し遂げようとしたのかを、その創設と発展に大きく寄与した人物で、学長を務めた島田雅治氏のオーラル・ヒストリー¹⁾から明らかにすることを目的としている²⁾。

ここでオーラル・ヒストリーの手法を採用したのは、加野芳正が指摘するように、近時さまざまな学問分野で聞き取りによる歴史研究に光が当てられるようになり、教育研究の分野でも用いられるようになってきていることがあげられる³⁾。その際加野は、政治史研究家の伊藤隆の言葉⁴⁾を簡潔にまとめ、聞き取りは研究にとって、①直接質問して回答がもらえるということであり、さらに再質問して回答してもらえる可能性のあること、②当事者から文献資料についての背景や解釈だけでなく、文献資料に書かれていない多くの事実、事柄の背景にある人間関係などを聞ける可能性のあること、③聞き取りから文献資料を提供してもらうキッカケが生じる可能性をもっていること、などの点で重要な情報源である、と紹介している。そこで、本稿でもその可能性を求めてインタビューを行うことにした。

ところで、聞き取りにあたっては、1991年4月の「短大開設準備室」の設置から、1993年4月の島根県立国際短期大学の開学、そして2000年3月の閉学にいたるまでの10年間の経緯を、できるだけ時系列にそって個人的な経験を本人に語ってもらうことと、その語りをも公立短大の設置ということからその社会的使命や県が果たした役割などの社会的な文脈のなかに位置づけるよう心がけた。後者については、とくに1980年代以降、国や地方自治体が新自由主義的政策に移行するなかで、日本の多くの自治体が少ない財源のなかでやりくりすることが求められ、市民参加・住民参加を基調とした協働によって地域づくりが進

められていくが、その動きのなかで公立短大がどのように設置されたのかが浮かびあがるとよいと考えた。

インタビューは、2021年10月2日に鳥田雅治氏の自宅で行った。聞き手と文は、鳥田博司（甲南女子大学教授・元鳥根県立大学非常勤講師）である。インタビューした内容は、聞き取った側が整理した上で、本人に改めて内容を確認してもらった。その際、オーラル・ヒストリーによって、話し手の「心の事実」を含めて「新しい事実」や各種「事情」を発掘し、「歴史の臨場感（鼓動）」が後世に伝わるよう努めた⁵⁾。

1. 鳥田雅治氏の略歴

鳥田雅治氏の略歴は、以下のとおりである。

〈生年・学歴・職歴〉

1928年、鳥根県能義郡荒島村（現：安来市）生まれ。1951年3月、広島文理科大学教育学科を卒業。同年4月より鳥根県立松江高等学校教諭・鳥根県立教育研究所研究員（兼任）・鳥根県教育委員会事務局職員（兼任）。同年10月より鳥根県教育委員会主事、1953年4月より鳥根県立盲学校講師（兼任）。1955年4月より鳥根県立農科大学女子家政短期大学部講師・鳥根県立保健婦専門学院講師（兼任）。1958年4月より鳥根大学教育学部講師、1961年8月より助教授、1973年4月より教授を経て、1991年3月に定年退官（同年4月、鳥根大学名誉教授）。1991年4月より鳥根県立短期大学開設準備委員会委員長。1993年4月より鳥根県立国際短期大学長、2001年3月に退任。この間、鳥根大学厚生補導協議会協議員、鳥根大学教育学部厚生補導長、鳥根大学評議員、鳥根大学教育学部附属中学校長、鳥根大学教育学部長、日本教育大学協会評議員・副会長、全国公立短期大学協会理事・副会長などを歴任。

〈主な社会的活動〉

- ①全国関係：国立三瓶青年の家運営委員、全国私立学校審議会連合会理事、日本退職公務員連盟評議員・理事、日本保育学会理事、能美寛研究会顧問など。
- ②鳥根県関係：鳥根県総合開発審議会委員、鳥根県教育課程審議会会長、鳥根県社会教育委員、鳥根県児童福祉審議会委員、鳥根県行財政改善審議会委員、鳥根県ふれあい県民運動協議会理事、鳥根県私立学校審議会会長、鳥根県立学校再編成検討委員会委員長、シマネスクくにびき学園運営委員長、鳥根県文化振興財団理事、しまね国際センター理事長、鳥根県地方分権・行財政改革審議会委員、ふるさと鳥根定住財団理事、しまね女性センター理事、青少年育成鳥根県民会議会長、鳥根県社会福祉審議会委員、鳥根県長期計画審議会委員、鳥根県生涯教育審議会議長、鳥根県生涯学習審議会会長、鳥根県肢体不自由児協合理事・会長、鳥根県退職公務員連盟会長・名誉会長など。
- ③松江市関係：松江市社会教育委員、松江市公民館運営審議会副会長、松江市教育文化振興事業団理事、松江市菅田会館運営審議会委員、松江市総合計画審議会委員、松江市行財政改革推進委員会委員、大橋川周辺まちづくり検討委員会委員長、松江四季の会会長など。
- ④浜田市関係：海のみえる文化ゾーン文化施設整備構想検討委員会委員長、浜田市行財政改革推進委員会会長、浜田市立図書館・郷土資料館建設基本構想検討委員会委員長など。

〈主な著書〉

『パパの幼児教育』（新人物往来社）、『子供がよくなる本』（山陰中央テレビジョン放送）、『鳥根県社会福祉史』（鳥根県社会福祉協議会）、『豊かに美しく生きる－生涯学習20講』（教育開発研究所）、『鳥根県老人クラブ連合会三十年史』（鳥根県老人クラブ連合会）、『青少年に贈る言葉 わが人生論 全国版』（文教図書出版）など。

〈主な賞および表彰〉

1983年、社会教育功労者表彰〔鳥根県社会教育委員連絡協議会会長〕、1985年、社会教育功労者表彰〔全国社会教育委員連合会長〕、1990年、市政功労者（教育文化）表彰〔松江市長〕、1991年、各種功労者（教育功労）表彰〔鳥根県知事〕、1993年、中国文化賞受賞〔中国新聞社社長〕、社会教育功労者表彰〔文部大臣〕、2000年、市政功労者（高等教育）表彰〔浜田市長〕、私学振興功労者表彰〔文部大臣〕、2014年、私学振興功労者表彰〔全国私立学校審議会連合会会長〕など。

〈章〉

2004年、瑞宝中綬章受章〔内閣総理大臣・内閣府賞勲局長〕。

2. オーラル・ヒストリーによる証言記録

(1) 開学の準備

1) 鳥根県立短期大学開設準備委員会委員長への就任

——1991年4月に鳥根県庁の総務部内に「短大開設準備室」が設置され、5月に「鳥根県立短期大学開設準備委員会」の第1回会合が開催される運びとなりますが、どのような経緯で委員長に就任されることになったのでしょうか。

当時、鳥根大学で仕事をしながら、鳥根県の審議会など数多くの仕事の依頼があり、多いときは12項目を引き受けていました。県からの依頼はそれ以上ありましたが、文部省のほうからもうこれ以上は学外の仕事を引き受けることを許可しないという連絡がありました。そこで県には、依頼するにあたっては、事前に県のほうで調整・選択してくれとお願いしていました。

そんなある日、ちょうど鳥根大学を退官するときのことでしたが、突然副知事の高橋悦郎氏が澄田信義知事の使いとしてやってきて、学長候補者として委員長就任への依頼があり、引き受けることになりました。

——委員長を引き受けるにあたって、鳥根の教育においてどのようなことを実現しようとしたのでしょうか。あるいは、どのような思いで短大をつくろうとされたのでしょうか。

そこには、ある思いがありました。話は、戦後間もないころまで遡ります。確か1947年の5月ごろだったような気がするのですが、当時私は鳥根師範学校の学生で、大学受験を前にしていた時分でした。そのとき、アメリカの教育学者であるオルセン（E. G. Olsen）らが執筆した『学校と地域社会（*School and Community*）』（1945）と出会いました。それは、戦後はじめて、私が原書で読んだ本でした。

きっかけとなったのは、「教育原理」の授業がとても印象深く、その人柄に惹かれていた近藤正樹先生（のちに鳥根大学教育学部長）から、この本の翻訳を依頼されたことでした。どうしてそういうことになったのかというと、以前先生が風邪をひかれて病床にあったと

きに、友人がお見舞いに行くというので下校時にいっしょにいったところ、先生から今度元気になったらいっしょに原書を読もうではないかという提案がありました。その後、実際に戦後の教育をどうするかについて考えるために、アメリカの教育について原書を読もうという話になりました。そんな折、文部省で今後の日本の教育をどうするかについてのワークショップがあり、各県の代表的な学者なり指導者なりが集められましたが、それに参加した近藤先生が鳥根に戻ってこられたときに、この本の一部翻訳を依頼されました。

その本は、各県におかれていた占領軍の民間情報教育局（CIE：Civil Information and Education Section）にあるとのことで貸しだしの手続きをしにいったところ、鳥根県教育委員会のヒコ・テラモト（寺本彦）指導課長（のちに鳥根大学教育学部教授）に貸しだしているの、そこにいけといわれました。そこで、県庁にも、ましてや教育委員会にもいくのがはじめての人間が恐る恐る役所にいき、寺本氏に面会を申し込み、経緯を話して貸しだしを頼みました。ところが、今これから教育委員会で自分たちもこの書物を中心に勉強しようと思っているところで貸しだせないといわれました。とはいえ、驚いたことにその場でその研究会への参加を促されました。そのとき、一学生相手にここまでいう人だったので、なかなかの人物だと非常に感心し、敬意を表した覚えがあります。しかし、おいそれとは返事ができず、とにかく本文を書き写すために借りたいと申しでました。最終的には、1週間ほど借りだすことができましたが、喜んだのも束の間のことでした。というのも、当時は物資不足の時代で、書き写そうにもなかなか大学ノートが手に入りませんでした。そんななか、やっとの思いで採りだして購入することができ、拙いながら訳をだしました。

そこには、学校はコミュニティ・スクール（地域社会学校）でなければならない、成人教育のセンターであるとあり、学校と地域は密接な関係をもたなくてはならないと書いてありました。なるほど、地域に閉ざされた学校ではなく、すべてに開かれた学校でなくてはならないと思いました。コミュニティ・スクールは、「生活や社会中心の立場にたった学校」であり、「生活や経験を通して、“なすことによって学ぶ”（learning by doing）学校」であり、また「地域社会のなかの学校」「地域社会をよりよくする学校」でもあるという内容は、自分としては大変勉強になったし、戦後日本の教育に役立つ基本的な考え方になるのかなあとと思うようになり、とても励みになりました。その後、鳥根の教育に携わることになったとき、それをずっと大切にしてきました。

話は少しそれますが、この本を読んでいたことが大学受験でとても役にたちました。というのも、専門の筆答試験の論題が「社会と学校について」で、すんなりと答案を書くことができました。その後、口頭試問があり、試験官の先生方には答案についてつまれ、この本をどういう経緯で読んだのかなどを尋ねられ、恩師のことなどをいろいろ話すことができ、とても印象に残る受験となりました。

さて、その後、急激な社会変化や高度経済成長があり、コミュニティ・スクールの考え方は後退していったのですが、1970年代に入り、人生が長くなり、社会が成熟するとともに複雑化してきたことを受け、人々が充実した人生を送るための生涯学習が不可欠になり、「生涯学習体系への移行」が求められるようになりました。そして、その視点や内容は戦後のそれとは異なりますが、コミュニティ・スクール構想が不死鳥のようによみがえり、その必要性が強調されるようになりました。

そして、迎えた1990年ごろは、地域の教育力の低下やその再生がいられていた時期で、全国的にみると県内に高等教育機関が少ないところでは、ほとんどの県が公立の大学をつくったり、つくろうとしたりしていました。そうしたなかで、澄田知事も当時の状況を見越しておられ、遅まきながら大学をつくりたいと思われていたようで、その実現に向けて、1989年9月6日に県内の高等教育機関整備の望ましいあり方を検討する「島根県高等教育機関整備推進懇話会」の第1回懇話会が開かれ、1990年2月21日に提言がまとめられました。これを受け、同年6月11日に整備の総合的なあり方を検討する「島根県高等教育機関整備構想検討委員会」の第1回委員会が開催され、1991年4月10日に短大設置について最終報告をまとめて知事に提出し、同年4月16日に「島根県高等教育機関整備基本方針」が策定されました。そこで、はじめて「島根国際短期大学（仮称）」の整備について具体的な内容が明示され、設置場所については浜田市とされました。

これと相前後して、4月には短大開設準備室が設置され、短大開設準備委員会が設けられることになりました。その際、推進懇話会と検討委員会にメンバーのひとりとして参加し、さらに当時、各方面の審議会の委員長などをしていた関係で県の状況をよく知っていた私に委員長就任の話が舞いこんできて、引き受けることになりました。

5月9日に開設準備委員会の第1回会合が開かれますが、そこでは、理想は大きくとも、とりあえず小さくともはじめようということで、「小さく生んで、大きく育てていこう！立派にしていこう！」というスローガンのもと、少人数の定員でもいいから大学をつくるということで動きだしました。まずは短大づくりからはじめて、将来的なビジョンとして、ゆくゆくは4年制の大学にしようということで、それが今日の県立大学の発足につながっていくわけです。

短大づくりにあたっては、島根にコミュニティ・スクールとしての役割や機能をもった大学をつくりたいという思いがありました。そこで今後の教育は、学校に閉じこもった教育ではなく、大学の成果を地域に送りだし、そして地域から学びとってという形でやっというと思っていました。今日大学を離れ、年齢（よわい）を重ねた今でも、その想いや方向性は正しかったと思っています。

2) どこに短大を設置するのか

——県西部の浜田市に短大が設置されたのですが、どのような経緯でそうなったのでしょうか。

当時、県東部には、松江市に島根大学と島根女子短期大学が、また出雲市に島根医科大学がありました。他方、県西部には、江津市に島根県唯一の私立の島根中央女子短期大学があったものの、いつしか学生募集を停止して休眠状態にありました（1968～1994）。こうした事情もあり、「教育と文化のひかりを県西部の石見に」という地元の強い要望をよく聞かされていました。

そこで、ここしばらく高等教育の空白地帯となっていたこの地域に、コミュニティ・スクールになるような高等教育機関をつくりたいという気持ちがより強くなっていきました。知事も、1990年1月4日に行われた年頭の新聞記者会見で、西部振興策の柱として県西部に公立の短大を設置したいと述べられていました。

そして、いよいよつくることになったとき、浜田市と益田市で誘致運動が盛んになり、

最終的には1991年4月に浜田市にキャンパス（益田市には空港）をつくるということで落ち着きました。当時の浜田市長の大谷久満氏は教育に造詣が深く、県教組の執行委員長なども経験した人で実行力も兼ね備え、その後大学をおおいに盛りたててくれることになりました。

3) どんな短大を開学するのか

——短大に、鳥根県で初の「国際文化学科」がおかれることになったのですが、どのような経緯があったのでしょうか。

どんな学科をおくかについては、県西部の意向をくみあげるために何回もセッションを開くとともに、他県の先進的な試みをしている公立大学に視察に赴きました。

当時の状況としては、国際化・グローバル化の時代を迎え、教育の国際化を進めていくことが期待されていたのですが、鳥根県にはそうした学科がありませんでした。そこで最終的には、国際化を推進していくセンターをつくりたいということで「国際文化学科」を設置することになり、大学名は「鳥根県立国際短期大学」となりました。

これを受け、短大開設準備室は、1992年度から名称を変更して、「国際短大開設準備室」となりました。そして、1992年4月27日には文部省に第1次設置認可申請書を、7月22日には第2次設置認可申請書を提出し、12月21日に設置認可がおりました。そして、1993年4月に開学する運びとなりました。

開学に向けた書類作成や文部省での打ちあわせには心労がとれない、なかなか大変だと聞いていましたが、幸い私が若いころ教育委員会の学事課に勤務していたときに学事課長としておられ、その後文部省の要職を歴任され、当時は日本育英会理事長で開設準備委員会の委員にもなっていたいただいた鈴木勲氏から、いろいろご指導・ご助言をいただくことができて、かなりスムーズに手続きをすすめることができました。心配は杞憂におわり、認可がおりたときにはホッと、開設準備室のメンバーたちとともに喜びをわかちあったことを覚えています。

——国際短大は、基本理念として「国際的な視野と幅広い教養・語学力を備えた人材育成」を掲げ、「様々な国際交流の場面で主体的に行動できる国際的コミュニケーション能力の高い人材を育成すること」を標榜しています。そして、それを実現するために英語・韓国語・中国語の教育に力点がおられました。具体的には、「米国文化体験」「韓国文化体験」「中国文化体験」といった特色ある科目が設けられ、アメリカではセントラル・ワシントン大学とワナチ・ヴァレイ大学、韓国では慶北大学校、蔚山大学校、延世大学校、中国では中央民族大学、寧夏大学、吉林大学などと協定を結び、国際交流に力をいれることになりましたが、どのようなお考えがあったのでしょうか。

国際化が叫ばれているなかで、英語は国際的に通用するので英語圏との交流は当然必要だけれども、当時等閑視されていた北東アジア文化圏との交流を、具体的には韓国や中国との交流を念頭において、大学をつくることにしました。

そこで外国語は、英語とともに韓国語と中国語を学べるようにしました。そうした学科は、歴史のある大規模大学には専門のコースがあるものの、新制大学や短大では見当たらなかったもので、これは先進的な試みになると考え、そこに着目しました。

英語は外国人専任教員を配して生きた英語を学ぶとともに、少人数クラスで実践的な英語力が身につくように配慮しました。韓国語と中国語は第2外国語として開講し、学生はこのうち1科目を選択することにしましたが、これは公立短大としては全国初の試みとして注目されました。

——特色ある教育として「研究テーマ選択による少人数教育」が行われていたそうですが、これにはどのような意図があったのでしょうか。

少人数教育ということでは、「小さく生んで、大きく育てていこう！立派にしていこう！」の精神の一環で、定員が少ない小規模校のメリットを活かし、学生を手厚く教育することをねらいました。日ごろから学生とコミュニケーションをし、学生にきめ細かい指導をし、一人ひとりの学生に目を配るようにしました。

研究テーマ選択では、地域の教育力の再生などを目指して、国内や北東アジアなどでの地域課題などに対して主体的に行動できる人材を育成するために役立てたいと考えていました。

——短大には「交流センター」がおかれましたが、どのようなことを期待されていたのでしょうか。

どんな教育をするにしても、理念や目的があるだけではそれは果たせないで、それを実現する施設として「交流センター」を設置し、国際交流だけでなく地域との交流を目指す活動を定期的に行うことにしました。当時、一般的に地域の人が大学にどんどん足を運ぶということにはなかった時代ですが、ここはいつでもだれでもこられるような施設とし、そこで講演会をはじめ、各種公開講座やさまざまな会合を開くことにしました。大学を地域に開放するわけです。開かれた大学、開かれたキャンパスとして、またオルセンのいう成人教育のセンターとして機能させようと考えました。今でこそよく耳にするようになりましたが、地域貢献や社会貢献をやる先進的な施設としてつくりました。

こうした施設づくりのアイデアは、設置の準備をしていくなかでだんだんまとまってきました。他県があまりやっていないような、しかも時代の先端をいくような大学をつくらうという意気込みや熱意がみんなにありました。

4) キャンパスの整備

——開学の精神（方向性）が決まり、いよいよキャンパスを建てる地として、市街の北部にある、当時は辺鄙な丘陵地が選ばれたのはなぜでしょうか。

短大を誘致するにあたって、地元となる浜田市が土地を提供するという条件がありました。浜田は山が海に迫っていて平地が少なく、平野部には広い土地を確保できませんでした。そこで、平野部からの交通の便などを考えて、通勤・通学に交通手段を使って10分以内でいける場所を丘陵地帯で探しました。適地がみつき、山を切り拓き、平地をつくることになりました。そこは、大学開設前は木々が生い茂り、だれも住んでいないところでした。

ところが、これが結果的に功を奏したと思っています。キャンパスが高台にできたことで、西に日本海を臨んで眺望がよく、空気も澄んできれいで、街の騒音もなく静かな環境

が用意できました。

その後、キャンパス周辺は、浜田市長がたんに教育への理解があるだけでなく、教育熱心だったということもあり、海のみえる文化ゾーンとして整備がすすめられ、発展していくことになります。1996年には、浜田市世界子ども美術館が開館するなどして、地域の教育力や文化力をあげていく場となっていきました。とくに市長は、私が鳥根大学在任中も研究室に來訪され、浜田市の教育で実現したいことなどを語っておられ、その姿は非常に印象に残っていました。

——キャンパスですが、ユニークな構造（配置）になっています。たとえば、図書館が海の景色を眺望できる西側の端に設置されましたが、そこにはどんなねらいがあったのでしょうか。あるいは学生に、どのような学習環境を用意しようとされたのでしょうか。

これは、とにかく大学をつくるような空き地がなく、高台を切り拓いてつくったという地勢的な制約があったということが一番大きいです。それから、浜田市とともに、地域の文化発信地としてふさわしい環境づくりのために、自然や環境に配慮した「公園の中の大学づくり」を目指したこともありました。予期しないことで偶然そうなった面もありますが、結果的にそれがユニークなキャンパス構造群となって、いい学習環境が用意できました。

とくに短大発足当時は、定員は全国の短大のなかで下から二番目という小さな大学で、その場所で小回りが利いて機能的に動けるキャンパスができたわけです。県立大学に移行して規模が大きくなった今も、そのよさは残っているのではないかと思います。

5) 国内だけでなく、世界中から優秀な教師を招く

——鳥根は交通の便がよくないことから“陸の孤島”と呼ばれ、しかも定員も100名という小さな短大なので、優れた教師を招くには相当ハンディがあったのではないかと思います。それにもかかわらず、国内から優秀な教師を集めるだけでなく、外国人教師や非常勤講師を多数招聘することができたと聞いています。どのような観点から、人選や処遇を進められたのでしょうか。

田舎の大学に国際的な視野をもって幅広くコミュニケーションできる人材を育てるために優秀な教師をどう集めるかは、知事や県担当者などとともに知恵を絞ったところです。「国際短大」という名にふさわしい指導者を得たいということで、外国人教師集めにエネルギーを注ぎ、私自身何回も中国や韓国の大学に足を運び、招聘活動をしました。その結果、慶北大学校や吉林大学などから各大学で高名な先生方を推薦していただくことができ、次々と着任していただくことができました。

どうしたのかというと、県財政は厳しかったのですが、なによりもまず厚遇するということになりました。詳細は事務サイドでないとわからないのですが、たとえば、韓国からきていただいた先生方は、まず本務校でこれまでどおりの給与をもらった上で、さらにこちらでも給与をだして厚遇したというように聞いています。このこともあり、着任希望者が多く、本当にいい先生方にきていただくことができました。

いい先生方なのでこちらは何年でもいて教育していただきたいと考えていましたが、赴任希望者が多かったり、各家庭の事情があったりで、概ね2年の赴任期間で交代するケー

スが多かったです。赴任期間はこちらが決めるのではなく、あくまでも送り出す大学に人事権を委ねていました。これは、結果的にこちらの様子を知っている先生が海外に増え、こちらの学生を現地に送りこんだときに面倒をみてもらえる先生が増えるといったメリットもあったように思います。

また、よい人材を集めるとなると、快適な居住空間を用意する必要もありました。よい人材は、海外からだけでなく国内からも集めなくてはなりません。そこで、低廉な家賃で高級な造りに配慮した教員宿舎として、大学のすぐ南側の山手に独立住宅を用意し、希望するならそこに住めるようにしました。多くの先生方に知らない土地に赴任していただくのですから、地元と協力して整備をすすめました。

さらに、非常勤講師できていただく先生もできるだけ高名な方をお願いし、不便なところにきていただくので手当てを厚くして招いていました。貧乏県でありながら英断があり、よくやってくれたと思っています。この処遇は県立大学でも引き継がれていたと聞いていますが、昨今の財政の厳しさはひとしおで、2020年の新学部発足にともなって待遇が変化したと聞いており、時代の変化を感じています。

6) 県内だけでなく、全国から優秀な学生を集める

——地域の大学ではあったが、全国から優秀な学生を集めるということで、なにかお考え(どんな戦略)があったのでしょうか。また、いざ全国から集まってくるとなると学生寮などを用意する必要があったと思いますが、どのようにされたのでしょうか。

県西部からは、戦前は地域の先人として森鷗外や西周といった著名人を輩出していましたが、戦後はなかなかでなくなっていました。そこで、戦前の先輩たちの努力を受けとめながら、新たな人材の育成を目指したいと考えました。

学生募集にあたっては、全国から優秀な若者を広く集めようということになりました。若者に東京などへの都会志向があるなか、田舎にできた大学にわざわざきてもらうことになるので、県内の高校にはとくにお願いして、開学から数年間は大学の魅力についてPR活動をさせていただきました。そこでは、教育内容だけでなく、どんな環境が用意されているかも伝えました。たとえば、一般に大学に進学するにあたって気になることのひとつに、学生の居住環境があります。そこで、さきほどお話しした教師用住宅の近くに学生寮を用意しました。それは、たんに通学に便利というだけでなく、学生にとって魅力あるキャンパスづくりの一環として教師とのコミュニケーションがとりやすいようにと考え、整備をすすめていきました。また、地域の文化発信地としてふさわしい環境づくりのために自然や環境に配慮した「公園の中の大学づくり」をしていることや、地域の拠点として「交流センター」があること、さらには「地域と一体化した大学づくり」(教育・文化ゾーンの創造)をしていることなど、どんなビジョンをもってつくられた大学なのかを具体的にアピールしました。

実際に入試をしてみると、学生集めは心配したほどのことはなくて、県内だけでなく県外からもどんどんきてくれました。北海道などからも、学生を集めることができました。そこで、大学をつくったことに対して、自分たちなりに満足したというか、意を強くしました。それが励みとなって、いっそう充実した、立派な大学にシなくてはという気持ちになりました。

（2）短大の開学

1）マネジメントのあり方

——開学とともに学長に就任されましたが、短大のマネジメントで重視されたことはなんでしょうか。それぞれのメンバーとは、どのようにかかわられていたのでしょうか。とくに短大時代のことを懐かしむ事務方のメンバーからは「“情”の鳥田」と呼ばれ、仕事がしやすかったという話をよく耳にしましたが、どんなことを軸にしてマネジメントしていたのでしょうか。

とくに先生方には全国のあちこちからきていただいていたから、新しい土地での生活がはじまり、そこで教育に力を注いでもらうために、最初に「住の確保」を重視しました。具体的には、徒歩通勤圏内に教師用住宅を用意し、通勤に手間取ることなく教師が安定的に安心して教育にかかわれるようにしました。そのことで、学生も先生とかかわりやすくなり、お互いの人間関係もよくなっていたと思います。

仕事をするにはなによりも円滑な人間関係が必要で、日ごろから事務方はもとより先生方ともできるだけコミュニケーションすることに務めていました。すると、それぞれがどういう考え方で仕事をしているのかがわかるようになります。学生に対しても、少人数の小規模大学という利点を活かして、コミュニケーションをとるようにしていました。たとえば、昼食会を設けて、4～5人ずつ全学生を順番に学長室に招いて話を聞いたりしていました。こうした活動は、言葉を交わすということだけではなく、折々に校内を巡回して学内の様子を知ることでも含んでいました。

大学には、基本的には毎朝9時すぎから夕方5時すぎ（土曜日は昼すぎ）まで出勤し、いつでも対応できるようにしていました。特別な事件はありませんでしたが、ひとりの学生が行方不明となったことがあり、それはその後みつかることはありませんでした。

対地域ということであれば、交流センターでなにかあるときや地域でなにか活動があるということであれば、大学のPRを含め積極的に参加するようにしていました。

2）学生の異文化体験へのとりくみ

——国際的な視野と幅広い教養・語学力を備えた人材を育成するために、「米国文化体験」「韓国文化体験」「中国文化体験」といった特色ある科目が設けられましたが、その一方で学生はどんな学びをすすめていたのでしょうか。

開学以来、異文化体験の参加率にみられる国際交流は、非常に活発でした。数値として把握しやすいのは、協定を結んだ大学への研修参加者数です。各年度を平均すると、延べ参加者数で7割以上の学生が参加していました。内訳をみると、おおよそですが、アメリカが6割、中国が3割、韓国が1割となっていました。参加者数の多さは、全国の公立短大でもトップクラスをキープしており、この点は誇れる実績で、学生にはこの体験を将来に生かしてほしいと考えています。

このほか、毎年、韓国の慶北大学校と蔚山大学校、さらに中国の寧夏大学から、短期語学研修生を10名から30名ぐらいの範囲で受け入れ、本学の学生との交流を深めていました。

3）地域に開かれた、交流の場としての大学づくり

——「教育と文化のひかりを石見に」ということで、いろいろな客員教授を招いて講演会を

開催されていたそうですが、どのような観点から人選をされたのでしょうか。

客員教授の方々には、交流センターにて各自に年1回ほど、月1回のペースで代わる代わる講演をしてもらっていました。この講演会は、地域に開かれた大学として、学生だけでなく地域の人たちにも開放しており、当時としてはユニークで、特色のある活動でした。

講演会には、さまざまな方面の著名な方々にきていただいていたいました。たとえば、黒田瑞夫元国連大使や橋本恕元中国大使といった外交官など、浜田にいると会う機会のない異色の人材にきていただいて、田舎ではなかなか聞けないことをいろいろな角度から話をしてもらいました。

また、初年度の入学生108名のうち100名が女子学生だったように、例年女子学生の入学が多かったことから、女性で活躍している人も探しました。具体的には、江戸や明治の生活風俗を生き生きと描いた漫画家であり、エッセイストや江戸風俗研究者としても知られる杉浦日向子氏には、従来の大学教師にはないカラーや空気を大学に吹きこんでいただきたいのと、大学のPRにもなるので短大設立5周年記念事業の一環として記念講演会をお願いしました。

それから、島根県出身者で国際的に活躍している人で、しかも島根愛に満ちている人と交流することで学生に島根県を身近に感じてもらいたかったということもあり、日本を代表する世界的なファッションデザイナーの森英恵氏にもきていただきました。公立大学がすることなので十分な謝礼をだすことはなかなか厳しかったのですが、快く客員教授を引き受けていただくことができました。地域に女性ファンが多かったことも招聘を後押ししました。

本当に交通の不便なところにきていただきましたが、客員教授の方々には口々にここにきてよかったとっていただくことができ、我々もうれしく思っていました。文化の僻地にきて、熱心に話を聞いてくれる学生や地域の人たちがたくさんいて、喜んでいただけたのではないかと思います。

——交流センターでは、地域の人を対象に「地球ビト養成講座」とネーミングされた公開講座が開催されています。その際、たんに話を聞いておわりというのではなく、地域との交流を広げる機会になるように企画されていたそうですが、具体的にはどのようなものだったのでしょうか。

交流センターでは、すべての社会人に開かれた公開講座として、「地球ビト養成講座」を無料で開催していました。この講座は、地球上のいろいろな国々の言葉・文化・歴史や日本の文化・歴史について学ぶもので、「語学講座」と「教養講座」と「リレー講座」の3つのサブ講座がありました。それぞれ、通年、もしくは前期・後期の半期単位でいくつかのテーマを用意し、1回90分で計4回から20回の日程で実施していました。語学講座では、英語・中国語・韓国語の初級・中級レベルの会話などを中心に、楽しみながら学べるようにしました。教養講座では、詩歌や文学を鑑賞したり、シルクロード関係の話を聞いたり、民俗学に親しんだりしてもらいました。リレー講座は、当初は「リレー式講座」と呼ばれて教養講座のなかで提供されていましたが、その後サブ講座のひとつとして独立し、「国際社会と異文化の理解」といったテーマのもと、複数の講師が交替しながら担当していました。また、交流センターに足を運びにくい地域の人たちには、1995年度から「出張講座」

を用意し、できるだけ多くの人に聴講してもらるようにしました。そこでは、浜田キャンパスの教養講座で提供していたものだけでなく、北東アジアや津和野本学をテーマにしたものなども開講していました。なお、年度別にみた総実施回数は、多少幅があるものの、概ね100回前後で推移していたと思います。

そして、「地球ビト養成講座」では、各テーマの受講がおわると、おおよそ8割以上の出席率をもって、それぞれの修了証を授与していました。受講者は、比較的高齢の男性が多かったようです。

——開学2年目となる1994年11月18日に、天皇が行幸されています。それは、本当に大変名誉なことだったと思いますが、どのような経緯でそうなったのでしょうか。その際、印象に残っていることはなんですか。

当時、天皇は全国を巡幸して、いろいろな人と親しくお話をするというのが国の方針としてあったと思います。そういうなか、本学の交流センターで地元の高齢者が学習しているということで、当日はシマネスクくにびき学園（高齢者大学校）が開講している教養講座の様子を視察する目的で来学されました。そのころ、とりわけ短大に、しかも公立に行幸された話はあまりなかったのではないかと思いますし、もし来学されるとなると一般には大学の教職員から反対の意見が多くであるというなかにあって、高齢者の学習風景を視察にこられるというのは異例のことだったのではないのでしょうか。

ところで、視察当日に突然のことでしたが、天皇に随行している宮内庁の方から学長である私に対して、30分ほど時間をあげるから両陛下と話してくださいませんかという打診があり、それは是非にということで、お茶を飲み、お菓子を食べながら話をする機会もつことになりました。私は大変光栄に思い、そういう場をもてたことをありがたく感じました。

警備の都合などもあったと思いますが、華やかな場所ではなく、交流センターのある建物の一角に用意したゲストルーム（御休憩室）でお話をすることになりました。その際、開学2年目だったので大学の将来像などについて聞かれましたが、「小さく生んで、大きく育てていこう！立派にしていこう！」ということで、小さな大学ではあるが今後おいに発展させていきたいと考えていることなどをお話しました。続けて、はじめての卒業生がですが、就職はどうなりますかと尋ねられました。こちらは、はじめての卒業生なので、就職開拓などで一所懸命努力中だとお答えしました。陛下の質問に答えるという形で話は進みましたが、この間、あっという間の30分だったと記憶しています。

その後、両陛下が視察をおえてお帰りになるということで、お迎えの車がもう目の前にきてさようならをすることになりました。一般人は縄張りがしてあって遠くの決められた場所からしかそのお姿をみるができなかったのですが、後日そこに陣取ったある学生から、随行者なしで両陛下と私の3人だけにいるところを望遠レンズで撮った写真があると伝えられました。当時、学生がカメラをもっていること自体が珍しかったのですが、みせてもらったところ、とてもいい構図の写真が撮れていました。その写真はいい記念になると学生から譲り受け、家宝だと思って今も大切にしています。

——ところで、国際交流推進のため、外国人教師が招聘されましたが、田舎の大学になじんでもらい、日本にいい印象をもってもらえるようになるためには配慮が必要で、個人的な交流をもつことが大切だろうと思います。学長ご自身は、個人的にはその先生方とどのような交流をされていたのか、披露していただけないでしょうか。

もちろん、公の待遇をよくすることは当然ですが、個人的には学長官舎にお招きして、食事会を開いていました。その際は、よろしければ奥さまもごいっしょにお越しくさないと声をかけていました。

当日は妻の徳子に料理を用意してもらっておもてなしをするのですが、それを機会に奥さんが学長官舎にこられるようになり、それぞれの方のご当地料理をごちそうになったこともありました。また、いっしょにキムチづくりや柿をとってきて干し柿づくりをしたり、妻がカーディガンを編んでプレゼントしたりするといったようなこともありました。

——大学も地域にオープンにということで、鳥根県や浜田市などの各地域とどのような連携・協働体制をとりたいとお考えになったのでしょうか。「地域の人材育成」「地域住民とのつながり」「地域社会の活性化」などの地域づくりや地域貢献といった観点で教えてください。

全国の先進県より一步遅れてスタートすることになった後発の大学であったので、そういう連携・協働活動は当然やらなくてはいけないということで、とりくんでいきました。そして、それがたんなる宣伝でおわらないように、いい学生も集まり、質の高い充実した教育をすることで、この大学にいつてよかったといってもらえるような大学にすることに努めました。

ただ、いかんせん規模が小さな大学で、教師の数も限られていたので、正直いって地域に対してできることは限られていました。このため、地域から求められても、多方面でいろいろと貢献することは難しかったです。そこで、専任や非常勤の先生方には、各自できることを、やれるところからやっただくことを願う、というスタンスで対応をお願いしていました。地域づくりや地域貢献の問題は、大学の規模が大きくなったときの課題になると考えていました。

4) 学生の主体性を重視し、交流活動を通して人格の完成を目指す

——学生の課外活動や文化活動などについては、どのような方針で応援していかれていたのでしょうか。

なにぶん規模の小さな大学のことで、学生の要望すべてに応じることはできませんでしたが、学校として協力できることがあればという姿勢で対応していました。主体的に行動できる人材を育成することが本学の理念であることから、とにかく学生の主体性を重視していました。大学側からなにかやれということではなくて、学生からやりたいという要望があれば、どんどんできるようにサポートしていました。たとえば、クラブ活動は、できるだけつくっていきました。体育系ではバドミントン・バレーボール・バスケットボール・空手・ゴルフ・テニス・乗馬など、文化系では華道・茶道・韓国語・中国語・外国食文化・音楽・石見神楽など、さまざまな活動がありました。

大学祭は「Sun Blue FESTIVAL」と呼ばれ、秋シーズンで概ね10月末に2日間の日程で

開催していましたが、学生だけでやるというのではなく、先生方も事務方も参加して盛りあげていくようにしていました。そこでは、学内交流だけでなく、地域交流もすすめていました。私も自宅で妻に毎年マドレーヌを100個ぐらいつくってもらってバザーにだすなどして、売りあげは学生の手に入るようにしていました。

——小規模大学だからこそできた側面も少なくなかったと思うのですが、結果的に学生や地域に対して教育と文化の「ひかり」をもたらしただけでなく、けっこう温かい大学になったのではないのでしょうか。ひかりというとなにか「知識」をもたらすだけのイメージがありますが、温かみのあるつながりづくりにも役立ったのかなあと思います。知識を高めるといふことと人間をつくるということ、なにか思われていたことはあったのでしょうか。

やはり教育には、昔からいわれているように知・徳・体の教育が必要です。確かに知識もですが、それ以上に徳というか、人間の立派さが大切でしょう。教育の目標は、教育基本法にあるように「人格の完成」が第一の目標であるべきで、勉強もさることながら交流活動を通して立派な人格をもった卒業生を送りだしたいと思っていました。

5) 鳥根県との関係

——公立大学の使命として鳥根県への貢献ということがあると思いますが、全国から学生を集めている以上限界はあると思います。卒業後の鳥根県への定着率や貢献という点では、どのようにお考えだったのでしょうか。

当時の県民が学生のことをどう考えてくれていたかはわからないのですが、地元の協力などがあって就職率はほぼ毎年9割をこえていました。当時としては、その割合の高さは非常に珍しいことで、結果がでてよかったです。

今となっては詳細を覚えていませんが、例年県内にとどまりたいという学生が6割ほどいて、ほとんど希望どおりになっていたように思います。それは県外での就職を希望する学生も同じで、できるだけ希望が叶うように努力をしてきたと記憶しています。

ただ、全国から学生を集めたので、卒業後の鳥根県への定着率や貢献という点では課題があったかもしれませんが、鳥根にいたいという学生にはその希望がだいたい叶っていたということになりました。

——大学運営への鳥根県のサポートで、印象に残っていることはなんのでしょうか。

澄田知事が先頭になって大学をつくりたいということで作られた大学だったこともあり、知事の大学運営に対する対応や理解は非常に深かったように思います。このため、機会あるごとに大学に寄っていただき、よく会合をしたものでした。知事には、厳しい財政事情のなかでも財政を厚くし、県庁に務めている優秀な人材を事務局長などに多数派遣していただき、短大の隆盛に力を注いでいただき、なんの不満もなかったです。

話は少しそれますが、サポートの厚さは学長退任後も続きました。どういうことかという、これはまったく予想もしていなかったことでしたが、あるとき知事が担当課長に私を叙勲に推薦したいから書類その他をきちんとつくるようにといわれたそうです。長年勤めた鳥根大学からではなく、県のほうが短大だけでなく鳥根県への長年の功績を認めてく

れ、知事がリードし県が主導する形で国のほうに推薦していただくことができ、瑞宝中綬章の叙勲が決まりました。その上、知事が主催して祝賀会を開催してくださいました。島根大学出身の教官が島根大学ではなく、県の主催で祝賀会が開催されるということはとても珍しいことで、今でも大変光栄に思っていますし、おおいに感謝しています。

(3) 島根の教育に残した足跡について

——それでは、最後の質問です。短大は2001年3月に8年間の役目をおえ、4年制の県立大学に移行することになりましたが、なにかやり残したことはありましたか。また、島根の教育にどのような足跡を残したとお考えですか。

実際に国際短大の成果がどうだったかについては調査をしたことはないですし、「教育は百年の大計」であって、たった8年というタイムスパンで成果が現れるものではなく、そういう近視眼的な視野で教育をみるべきではないでしょう。島根の教育への願いはあっても、その成果がみえるようになったとはなかなかいえ、後世の人の評価を待つしかないと思います。

とはいえ、やりきった感があり、とくにやり残したことはなにもないです。小さいなりに最大の努力をしたという自負があり、短大開設準備委員会の発足から数えれば充実した10年間を送ることができました。とにかく短大をつくり、国際化・グローバル化という時代の課題に対応するために国際文化学科を設置し、交流センターをおくなどすることで教育に独自色を打ちだすことができました。地域に豊かな教養をもった人がひとりでも増えることを願い、そのために優れた教師や学生を集めることができ、県西部における高等教育の拠点づくりも進めることができました。国際社会や地域に貢献できる人材育成をしていくための地歩を固めることはできたのではないかと考えています。「小さく生んで、大きく育てていこう！立派にしていこう！」という精神でやってきた短大ですが、これを県立大学として次につなぐことができました。これにともない、定員も200名と倍増し、その精神が脈々と受け継がれていくのを見届けながら退任できて、非常に光栄なことだったと思っています。

島根県立大学には、総合政策学部総合政策学科が設置され、その後大学院開発研究科と北東アジア研究科（のちに、北東アジア開発研究科）がおかれ、短大の理念である国際交流の精神が受け継がれていくことになり、島根の教育の発展に一定の貢献ができたのではないかと実感するとともに、自負しています。これもみなさんのおかげだと、感謝しています。

おわりに

本稿では、島根県立国際短期大学の創設メンバーのひとりである島田雅治氏に聞き取り調査を実施して、浜田キャンパスの離陸期にあった国際短大時代において、その創立と展開においてどんなことがあったのか、その一端を後世に残しておく作業をすすめてきた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

島根県立国際短期大学は、1993年に島根県西部に高等教育の拠点をつくるために設立された。大学の使命（ミッション）は、国際的な人材を育成するとともに、地域の活性化を図ることにあった。大学の未来像（ビジョン）は、「小さく生んで、大きく育てていこう！

立派にしていこう！」というスローガンで表現され、「教育は百年の大計」というスパンで考えられていた。その理想を実現する意気込みは、時代や地域の要請に応じていて、しかも他県ではあまり類をみない学科やセンターのある大学で、さらに時代の先をいくような大学をつくらうとする情熱（パッション）となって表れていた。それは、国際文化学科や交流センターの設置として結実し、大学の独自色を打ちだしていくことにつながっていく。教育の特色は、「国際交流」「コミュニケーション」「人材育成」「北東アジア」「少人数教育」「主体性」「開かれた大学」「地域交流」「地域貢献」などのキーワードで把握することができた。

短大は、厳しい県財政のなかでも手厚いバックアップを受け、さまざまな面で充実が図られていた。とはいえ、小規模校のため、教師も多くはなくて、地域貢献をする際には人手が足りないこともあったが、そこは「各自ができることを、やれるところからやっっていこう」の精神で運営されていた。

短大が実際に滑りだしてみると、学生募集も順調で、就職率も高かった。この結果を受け、大学スタッフは、立派な大学にしていこうという初心を新たにするとともに、引き続きビジョン実現に向かっていくことになっていく。その後、短大は2001年に閉校し、鳥根県立大学へと発展的に移行する。2007年には法人化して鳥根県立大学浜田キャンパスとなり、2022年となった本年は創立30周年を迎えている。

ところで、この間のキャンパス組織の展開をステージとしてまとめてみると、第1ステージ「鳥根県立国際短期大学時代」（1993～2001）、第2ステージ「鳥根県立大学1学部時代（総合政策学部）」（2000～）、第3ステージ「鳥根県立大学2学部時代（国際関係学部・地域政策学部）」（2021～）、の3段階にわけることができる。今、浜田キャンパスは新たなステージに入り、大いなる飛躍が期待されている。

今後、第2ステージに続いて、第3ステージへと隆盛していくキャンパスの足跡をさまざまな形で記録していく必要があるだろう。各ステージの発足時の定員をみると、100名から200名へ、そして230名へと規模を拡大していくとともに、教育内容などのいっそうの充実が図られてきている。そこでは、短大から大学への移行、学部学科や大学院の新設や改組、法人化と松江・出雲・浜田の3キャンパス化、教職課程の設置と廃止など、キャンパスのありように重大な変化を与えた出来事が続いている。「不易と流行」という言葉があるが、時代時代でその使命やビジョン、標語、浮かびあがってくるキーワードは変わらないところとそうでない部分があるに違いない⁶⁾。浜田キャンパスがどう発展してきたのか、その全体像をつかむためにも、これらにまつわる証言記録を集積していく必要があるだろう。

こうしたアプローチは、浜田キャンパスだけでなく、松江キャンパスや出雲キャンパスにも広げていくことで、県立大学全体の発展の様子も俯瞰できるようになるはずである。それらの成果を待つとともに、今後の県立大学の発展を祈念したい。

注

- 1) ここでいう「オーラル・ヒストリー」は、「インタビュー」や「聞き取り」とほぼ同義で使用している。
- 2) 鳥根県立国際短期大学の設置に至るまでの経緯については、1993年3月に鳥根県総務部国際短大開設室がまとめた『鳥根県立国際短期大学の設置に至る経緯概要（構想から開学まで）』がある。また、開学から閉学までの沿革については、鳥根県立国際短期大学記念誌編集委員会が編集した『鳥根県立国際短期大学のあゆみ（鳥根県立国際短期大学記念誌）』（鳥根県立国際短期大学記念誌編集委員会、2001）と、ミニ冊子として作成された『鳥根県立国際短期大学の軌跡』（鳥根県立国際短期大学、2001）がある。
- 3) 加野芳正「序論 七〇周年事業とオーラル・ヒストリーでたどる教育社会学の展開」日本教育社会学会編『教育社会学の20人—オーラル・ヒストリーでたどる日本の教育社会学』東洋館出版、2018、13-15頁。
- 4) 中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門』東京大学出版会、1977、279頁。
- 5) 原彬久『戦後政治の証言者たち—オーラル・ヒストリーを往く』岩波書店、2015、27-30頁。
- 6) ちなみに、2021年10月9日付けの『山陰中央新報』には、鳥根県立大学からの広告がでている。ここでは、鳥根県観光キャラクターで、しまねsuper大使の吉田くんが「けんだい」の文字入りTシャツを着て登場し、読者に向けて「知ってた？」と問いかけ、その答えとして「これからの鳥根を牽引していきます」と意思表示されている。そして、県立大学全体に共通する基本的な使命として「これからの鳥根創生」があげられ、浜田キャンパスは「国際交流」と「地域振興」の2つを担っていくことが提示されている。なお、県立大学が「鳥根創生」を基本的な使命としている背景には、2014年に第2次安倍内閣が日本全体の活力向上を目指す看板政策として、「地方創生」を掲げたことがある。これに基づき、鳥根県では、2015年10月19日に「まち・ひと・しごと創生 鳥根県総合戦略」（2015年度から2019年度）が策定された。現在は、2020年3月17日に決定した「鳥根創生計画」（2020年度から2024年度）に基づいて、鳥根創生が推進されている。

キーワード：国際交流、コミュニケーション、人材育成、北東アジア、少人数教育、主体性、開かれた大学、地域交流、教育は百年の大計、オーラル・ヒストリー

(SHIMADA Hiroshi)

History of the Founding and Development of Shimane International College Traced by the Testimony of Former President SHIMADA Masaharu

SHIMADA Hiroshi

Abstract

This paper describes the history of Shimane International College from the oral history of former president SHIMADA Masaharu, who was a major contributor to the founding and development of the college.

Shimane International College, which was the predecessor of the University of Shimane (Hamada Campus), was established in 1993 to create a base for higher education in the western part of Shimane Prefecture. The mission of the college is to foster international human resources and revitalize the region. The vision for the development of the college was expressed with the slogan, "Let's establish a small college, promote its growth, and make it more splendid!" The enthusiasm to realize this vision was manifested in the passion to create a college that responds to the demands of the times and regions, and has departments and centers that are unique in other prefectures, and that is even ahead of the times. The characteristics of education can be grasped by keywords such as international exchange, communication, human resource development, Northeast Asia, small-group education, independence, college opened to the community, regional exchange, and regional contribution.

The college received a generous back-up despite the tight prefectural finances, gathered excellent faculty members, and clerical staffs, and enhanced various aspects such as educational content and educational environment. However, because the college is a small school, there were not many faculty members, and there were times when there was not enough manpower to contribute to the community. Therefore, it was operated with the spirit of "Let's do what each person can do". When the college actually opened, student recruitment was smooth and the employment rate was very high at that time. In response to this result, the college staff will renew their original intention to "Let's make the college more splendid!" and will continue to work toward the realization of the vision. Then the two-year college was transformed to the University of Shimane.